

## I テサロニケ 3 章 11～13 節「熱い祈り」

パウロはは祈りにおいても主に仕え、教会の兄弟姉妹のために仕えていました。10 節。「夜昼、熱心に祈っています」と言った後に、パウロは実際にその祈りをささげ、書き記しています。

### 1. 信仰の成長のために（：10～11）

パウロは信者たちの信仰の成長のために祈っています。この祈りについて三つのことに注目します。一つは、パウロはこの祈りを「夜昼、熱心に祈っている」ということです。夜も昼も定期的な祈りの度に、テサロニケの信者たちのことを思い起こして、とりなして熱心に祈っているということです。

私たちは、パウロが定期的に祈りの時間を頻繁に持っていたこと、そしてその度に各地の教会の人々のことを思い起こして祈っていたことを知ることができます。私たちも定期的な祈りの時間を持つこと、そしてその度に人々のことを覚えて祈ることを教えられます。

二つ目に、パウロの祈りが自らの具体的な行動と結びついているということです。パウロは「あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるように」と願って祈っていました。ここで気づかされることは、パウロはただ漠然と祈っているのではなく、そのために自分を「行かせてください」と祈っていることです。これは、彼らに直接会って仕えたい、そして神に仕えたいという奉仕の心から出ている祈りなのです。またこれは、「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか」という主の声を聞いて、イザヤが「ここに私がおります。私を遣わしてください」（イザヤ 6：8）と言ったことと似ています。

この心構えは私たちも持つ必要があります。祈るべき人たちのために実際に出て行って仕えることが可能な人は少ないかもしれません。しかし、奉仕の心構えは私たち誰もが持つ必要があります、奉仕の心をもって祈る必要があります。そして、誰でも何かはできるのではないのでしょうか。祈りと具体的な奉仕によって、私たちは誰かの信仰の成長のために仕えることができるのです。祈っている方のために自分が具体的な行動をすることができるようにと祈ることが大切です。

三つ目のことは、パウロが自分の望むとおりに仕えることを妨げているものに気づいていることです。それでもなお彼は祈り続けています。サタンの妨害を感じていましたが、なおもパウロは祈っています。11 節。

たとえサタンの妨げがあっても、神はさらに大きな力と権威をお持ちです。「私たちの父である神」はご自分の子どもたちに最善の道を開いてくださいます。「私たちの主イエス」はすでにサタンに勝利されました。死にも打ち勝ち、生きておられます。ですから、サタンに勝る権威と力を持っておられる父なる神と主イエスにパウロは祈っているのです。

困難に直面し、道が閉ざされるときに、簡単に「これはみこころではない」と言って何もしないなら、それは神のみこころを正しく捉えてはいないのではないのでしょうか。難しい状況になった時に、自分は本当に主に従っているのか、主のみことばに従っているのかを問うべきです。私たちも、サタンの妨害によって失望して祈りをやめてしまうのではなく、さらに神の民に対する熱い思いを持ってとりなして祈るようにしたいと教えられます。

### 2. 愛が豊かになり、あふれるように（：12）

12 節では、パウロはテサロニケの信者たちの愛が豊かになり、あふれるようにと祈っています。テサロニケの信者たちの信仰の成長のために祈っていますが、彼らの愛が豊かになり、あふれるようにと祈っています。

このような主張は古代の社会ではあまりなかったでしょう。上下関係が中心の生活だったでしょう。自分の上の立場の誰かに忠誠と愛情を示すことのほうが優先されたことでしょう。しかし、パウロは教会にも、またクリスチャンが教会の外の人々に接するあり方にも、社会でのあり方を認めません。「互いに対する愛」、つまり教会の兄弟姉妹の間での愛と、「すべての人に対する愛」、つまり教会の交わりの外部の人たちへの愛が、豊かになり、あふれるように祈っています。

この世の中には多くの愛の主張、偽りの愛の様々な形があります。しかし、クリスチャンが受け取っている神の愛に並ぶものはありません。神の愛を受け取っているクリスチャンがそれを示すなら、

自己中心の欲望で満ちている社会に対して大いに意味があります。

けれども、残念なことに、クリスチャンであっても互いの中で、また周りの人々に対して、争いや分断を起こしてしまうことがあります。罪を赦されていますが、罪を犯しやすいお互いです。また、心に余裕を持たないほどの苦難に遭うとき、互いの中で軋轢を引き起こしたり、迫害する者に対して憎しみを持つことを正当化したりもします。

ですから、パウロのように祈り続けていく必要があります。「主が豊かにし、あふれさせてくださいますように」。私たちは器のようなものです。内側から愛が湧き出てくるではありません。主が愛を注いでくださっていて、その愛があふれ出ていくのです。主イエス様によって明らかにされ、豊かに与えていただいている神の愛を、私たちが受け取り、知らされ、そして、私たちを通して神の愛が周りの方々に表されていくのです。そのことを求めて祈り続ける必要があります。

パウロはこのようにテサロニケの信者たちのために祈りながら、自分自身のために祈る必要があることもよく承知していました。自分たちはもう十分成長しているとか、そのような祈りは必要ないと思っっているではありません。自分たちも主の愛が必要であること、自分たちにも主の愛が注がれ、その愛があふれて人々を愛していることを忘れてはいません。

### 3. 聖であり、責められるところのない者に（：13）

最後に 13 節でパウロは、テサロニケの信者たちが心を強められ、キリストの再臨のときには「聖であり、責められるところのない者」になるように祈っています。

12 節から続いて、主が彼らの「心を強めて」くださるようにと祈っています。「心を強める」とはどのようなことでしょうか。パウロは信者たちの行動に関心を持っています。しかし、行動が変わるには、心が変わる必要があります。彼らの信仰が成長するには、彼らの心が強められる必要があると考えています。行動の源である心が、主によって強められることをパウロは祈っています。

主が「心を強めて」くださるなら、その人はイエス・キリストに対する信頼と確信を持って、みことばに聞き従い、喜んで主に仕えていくことでしょう。そうになっていくなら、主イエス様が再び来られるときになされるさばきを恐れる必要はありません。私たちが仕えている神、主は人の心の中もすべてご存知です。「主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます」（I コリント 6:5）。そのお方の前で、上辺だけでなく、心が強められるようにと彼は祈っています。

そしてパウロは、信者たちの心が強められて、「私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように」と祈ります。「責められるところのない」とは、目に見える行動に関することで、非難されるところがないことです。「聖」であるとは、父なる神との関係においてのことで、神のために取り分けられたものであることを表します。それも、一時的なこの世の基準によって測られるのではなく、神の御前で「聖であり、責められるところのない者」としてくださることを祈り求めています。

またパウロはこのことを世の終わりからの視点で見えています。「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるとき」を覚えて、そこに向かって今を生きているクリスチャンたちのためにこのように祈っています。

そのように私たちは、主イエス様の再臨からの視点で今を見る必要があります。私たちが人々のために祈るとき、その人々と自分自身が再臨のときに向かって進んでいることを意識して祈る必要があります。現在の生活が神の御前に立つときの備えになることを意識するように祈るのです。

私たちはこのような祈りをささげていたでしょうか。パウロに倣って祈りましょう。兄弟姉妹のことを名前を挙げて祈りましょう。その人の信仰の成長のために、自分が具体的に奉仕できるように、祈りの度に祈り続けましょう。妨げがあっても失望せずに祈りましょう。

また、教会のお互いに対し、またすべての人たちに対して愛が豊かにされ、あふれるように祈りましょう。主がそうしてくださることを求めて祈りましょう。

そして、キリストの再臨のときに神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださるよう、そのときに向けて備えさせてくださるよう祈りましょう。